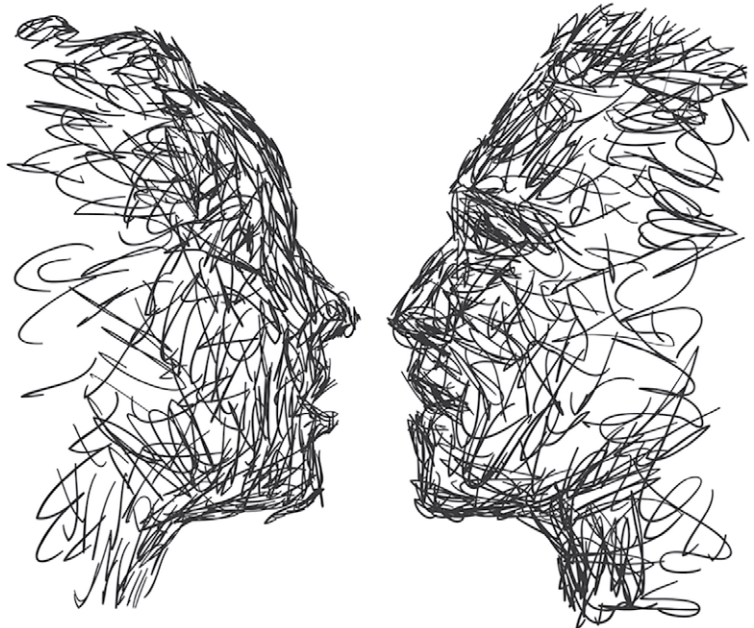


Ikuko Sagiyama  
Valentina Pedone



# ■ Perspectives on East Asia



STUDI E SAGGI

- 130 -

FLORIENTALIA  
ASIAN STUDIES SERIES – UNIVERSITY OF FLORENCE



*Scientific Committee*

Valentina Pedone, Coordinator, *University of Florence*  
Sagiyama Ikuko, Coordinator, *University of Florence*  
Ester Bianchi, *University of Perugia*  
Alessandra Brezzi, *University of Rome "La Sapienza"*  
Marco Del Bene, *University of Rome "La Sapienza"*  
Paolo De Troia, *University of Rome "La Sapienza"*  
Fujiwara Katsumi, *University of Tokyo*  
Guo Xi, *Jinan University*  
Hyodo Hiromi, *Gakushuin University Tokyo*  
Federico Masini, *University of Rome "La Sapienza"*  
Nagashima Hiroaki, *University of Tokyo*  
Chiara Romagnoli, *Roma Tre University*  
Bonaventura Ruperti, *University of Venice "Ca' Foscari"*  
Luca Stirpe, *University of Chieti-Pescara "Gabriele d'Annunzio"*  
Tada Kazuomi, *University of Tokyo*  
Massimiliano Tomasi, *Western Washington University*  
Xu Daming, *University of Macau*  
Yan Xiaopeng, *Wenzhou University*  
Zhang Xiong, *Peking University*  
Zhou Yongming, *University of Wisconsin-Madison*

*Published Titles*

Valentina Pedone, *A Journey to the West. Observations on the Chinese Migration to Italy*  
Edoardo Gerlini, *The Heian Court Poetry as World Literature. From the Point of View of Early Italian Poetry*  
Ikuko Sagiyama, Valentina Pedone (edited by), *Perspectives on East Asia*

# Perspectives on East Asia

edited by  
IKUKO SAGIYAMA, VALENTINA PEDONE

FIRENZE UNIVERSITY PRESS

2014

Perspectives on East Asia / a cura di Ikuko Sagiyama,  
Valentina Pedone. – Firenze : Firenze University Press, 2014.  
(Studi e saggi ; 130)

<http://digital.casalini.it/9788866556497>

ISBN 978-88-6655-646-6 (print)  
ISBN 978-88-6655-649-7 (online)  
ISBN 978-88-6655-651-0 (EPUB)

Graphic design: Alberto Pizarro Fernández, Pagina Maestra  
Front cover photo: © Robodread | Dreamstime.com

*Peer Review Process*

All publications are submitted to an external refereeing process under the responsibility of the FUP Editorial Board and the Scientific Committees of the individual series. The works published in the FUP catalogue are evaluated and approved by the Editorial Board of the publishing house. For a more detailed description of the refereeing process we refer to the official documents published in the online catalogue of the FUP ([www.fupress.com](http://www.fupress.com)).

*Firenze University Press Editorial Board*

G. Nigro (Co-ordinator), M.T. Bartoli, M. Boddi, R. Casalbuoni, C. Ciappei, R. Del Punta, A. Dolfi, V. Fargion, S. Ferrone, M. Garzaniti, P. Guarnieri, A. Mariani, M. Marini, A. Novelli, M. Verga, A. Zorzi.

© 2014 Firenze University Press  
Università degli Studi di Firenze  
Firenze University Press  
Borgo Albizi, 28, 50122 Firenze, Italy  
[www.fupress.com/](http://www.fupress.com/)

*Printed in Italy*

## TABLE OF CONTENTS

PREFACE	VII
<i>Ikuko Sagiyaama, Valentina Pedone</i>	
JAPANESE STUDIES	
役者評判記と遊女評判記の交流—『おもはく哥合』について— EXCHANGES AND RELATIONSHIPS BETWEEN THE CRITIQUE ABOUT ACTORS AND THE CRITIQUE ABOUT PROSTITUTES: <i>OMOWAKU UTAAWASE</i>	3
<i>Takei Kyōzō</i>	
イポテクストとしての菅原道真の詩 『和漢朗詠集』と『源氏物語』の場合 SUGAWARA NO MICHIZANE'S POEMS AS HYPOTEXT: THE CASE OF <i>WAKANRŌEISHŪ</i> AND <i>GENJI MONOGATARI</i>	13
<i>Edoardo Gerlini</i>	
SPIRIT, BODY, AND THE CONSTRUCTION OF THE SELF: SOME PRELIMINARY CONSIDERATIONS ON THE QUESTION OF CHRISTIANITY IN MODERN JAPANESE LITERATURE	31
<i>Massimiliano Tomasi</i>	
THE INCORPORATION OF SCIENTIFIC DISCOURSE IN YAMAMURA BOCHŌ'S 'PRISMIST' POETRY (1914-1916)	53
<i>Pierantonio Zanotti</i>	
CHINESE STUDIES	
CHINESE ENTREPRENEURS IN ITALY. AN ASYMMETRIC SOCIO-ECONOMIC EMBEDDEDNESS	81
<i>Eduardo Barberis</i>	
100 YEARS OF QIAN ZHONGSHU AND YANG JIANG: A CENTENNIAL PERSPECTIVE	103
<i>Tiziana Lioi</i>	

CHINA'S PUBLIC DIPLOMACY: BETWEEN OLD PROPAGANDA AND CIVIL PARTICIPATION <i>Tanina Zappone</i>	117
THE BORDER AND THE HINTERLAND: TWO DIFFERENT PICTURES OF COMMERCE DEVELOPMENT IN THE NORTHERN SHAANXI PROVINCE SINCE THE 15 <sup>TH</sup> CENTURY <i>Zhao Yuhui</i>	147

イポテキストとしての菅原道真の詩 『和漢朗詠集』と『源氏物語』の場合

SUGAWARA NO MICHIZANE'S POEMS AS HYPOTEXT: THE CASE  
OF *WAKANRŌEISHŪ* AND *GENJI MONOGATARI*

エドアルド・ジェルリーニ

ヴェネツィア大学

*Edoardo Gerlini*

Ca' Foscari University of Venice

*Abstract*

Objective of this paper is to demonstrate and analyze the transtextual relations that lay between Sugawara no Michizane's poems collections *Kanke bunsō* and *Kanke kōshū*, and two important Heian period works, namely Fujiwara no Kintō's *Wakanrōeishū* and Murasaki Shikibu's *Genji Monogatari*. I apply the theory of hypertextuality proposed by Gérard Genette to these works, focusing on the problem of hypertextuality, and demonstrating that the terminology created by Genette about European literature can be adopted to effectively analyze ancient Japanese works. This results in a deeper understanding of the works themselves and the authors' peculiarities and abilities.

*Keywords*

Transtextuality, Sugawara no Michizane, *Wakanrōeishū*, *Genji monogatari*, Gérard Genette

**要旨**

本論文は平安文学に見られる超テキスト性、つまりテキストとテキストの間における関係を分析するものである。分析対象は『和漢朗詠集』及び『源氏物語』、そして両作品における菅原道真の詩の引用と、道真に関係づけられる箇所である。分析方法は、フランス文学理論家ジェラルド・ジュネットによるイペルテキスト性についての理論及び用語を用いる。欧州文学を中心とするジュネットの理論は、平安時代の文学にも適用でき、対象作品に新しい光を与えられることを検証する。ジュネットに定義されたいくつかのイポテキスト的変形は『和漢朗詠集』と『源氏物語』にも見いだすことができる。しかし、藤原公任と紫式部が果たした変形実践は、異なった様相を見せており、作者それぞれの目的にも相違があることを確認する。

**キーワード**

超テキスト性、菅原道真、和漢朗詠集、源氏物語、ジェラルド・ジュネット



## 1. はじめに

本論文は平安文学に見られる超テキスト性、つまりテキストとテキストの間における関係を分析するものである。その対象は『和漢朗詠集』及び『源氏物語』、そして両作品における菅原道真の詩の引用と、道真に関係づけられる箇所限定する。本文の分析には、フランスの文学理論家ジェラルール・ジュネット (Gérard Genette)<sup>1</sup>による超テキスト性についての概念及び用語を用いることとする。欧州文学を中心とするジュネットの理論は、平安時代の文学にも適用でき、対象作品に新しい光を与えられることを確認したいのである。

ジュネットは、ある作品におけるテキスト的超越性いわゆる超テキスト性 *transtextualité* を「テキストを他のもろもろのテキストに、明示的にか暗黙裡にかはともかく、関係づけているあらゆるもの」<sup>2</sup>と説明する。氏に定義された超テキスト性の様々なタイプの中で最も中心とされているのはイペルテキスト性 *hypertextualité* であり、「あらゆるテキストB (これをイペルテキスト *hypertexte* と呼ぼう) を、注釈のそれではない仕方ですれが接ぎ木されるところの先行するテキストA (もちろんこれはイポテキスト *hypotexte* と呼ぶことにする) に結び付けるあらゆる関係なのである」<sup>3</sup>と説明される。

本論では菅原道真の『菅家文草』と『菅家後集』が『和漢朗詠集』と『源氏物語』にイペルテキスト的な関係で結ばれていることを確認した上で、そこにどのような変形と変換のプロセスが見られるかということを考えてい。

菅原道真についての先行研究の大部分は、道真の生涯と詩文の直接的な関係を強調してきた。歴史的研究という視点から分析すると、道真筆とされている『菅家文草』と『菅家後集』は貴重な資料ではあっても、あくまで十分に信用できる史料とは言えないだろうが、先行研究に指摘されたように「道真の物語」のようなストーリーが、彼の詩集から浮かび上がることは明瞭である。もちろん、散文でもあり、韻文でもある『菅家文草・菅家後集』は、物語と同じ程度でフィクションだとは言いきれないが、道真の人生に影響した出来事、例えば大宰府への流謫が、彼の文学にも直接に影響を与えたことは言うまでもない。つまり、菅原道真の詩は彼の人生を語るのだと言っても言いすぎではないだろう。

<sup>1</sup> ジェラルール・ジュネット著、和泉涼一訳『パランプセスト : 第二次の文学』(水声社、1995)。原作 Gérard Genette、*Palimpsestes: La Littérature au econd degré*、(Du Seuil、パリ、1982)。

<sup>2</sup> 注1前掲書、15頁。

<sup>3</sup> 注1前掲書、20頁。

そして、その道真の詩文は、ほとんど完全な形で現存しており、すでに平安時代から評価されていた結果、様々な作品に引用されたり、再利用もされてきた。平安時代においても道真の作品の受容と採用は多様であるが、本論では『和漢朗詠集』と『源氏物語』の二作品に着目したい。

## 2. 『和漢朗詠集』の場合

周知の通り、藤原公任選『和漢朗詠集』は和歌と詩句の混合された特殊な詩歌集である。花鳥風月などの景物と様々な題によって詩歌を配列し、平安時代以来非常に普及し、教育のためにも不可欠な書物であった。現在では『和漢朗詠集』を知らない人が多かろうが、明治時代までは『源氏物語』と同じような人気作品だった。

『和漢朗詠集』の詩人歌人のなかでは、菅原道真の詩句が白居易（135回）と菅原文時（44回）に次いで多く採られており、38回からなる高い頻度で選入されている。このことから単純に想像しても、アンソロジーである『和漢朗詠集』には道真の詩風が十分に紹介されていると期待するのが当然だろうが、実はその逆である。

現在、アンソロジーというと、例えば高等学校で使われている国語教科書は、様々な作家の作品を単純化してはいても、できるだけその作家の特殊性とスタイルを忠実に紹介しようとするものであろう。各作品から抜粋を抽出して、その作家のスタイル、またはテキストの性格及びより興味深い箇所をできるだけ保存しようとしているのである。これは「義務」とも言える目標である。これはジュネットの用語でいうと簡潔化 *concision*<sup>4</sup> または凝縮 *condensation*<sup>5</sup> というテキストの変形であり、例えばダイジェスト *digest*<sup>6</sup> や要約 *résumé*<sup>7</sup> はその実践による結果である。

しかし、藤原公任は、通常八句四聯となる漢詩からほぼ一聯（二句）だけを採り、そして景物や自然の描写に集中し、元の漢詩の大部分を切り捨てるのである。このようなテキストの変形をジュネットは切除 *excision*<sup>8</sup> と名付けている。簡潔化も切除も、テキストを短縮する縮小 *réduction* という変形の類であるが、内容の重点を残す前者に対して、後者はテキストの広い部分と一緒にイポテキストの意味も削除してしまう。

<sup>4</sup> 注1 前掲書、399頁。

<sup>5</sup> 注1 前掲書、419頁。

<sup>6</sup> 注1 前掲書、430頁。

<sup>7</sup> 注1 前掲書、419頁。

<sup>8</sup> 注1 前掲書、390頁。

『和漢朗詠集』にある道真の詩句はちょうどこの原則に従い、元の詩の意味を失ってしまったと言えよう。例えば、霜の部に採られた次の聯を見よう。

君子(くんし)夜(よ)深(ふ)けて音(こゑ)警(いまし)めず、  
老翁(らうおう)年(とし)晩(く)れて鬢(びん)相驚(あひおど  
ろ)く、  
君子夜深音不警  
老翁年晩鬢相驚<sup>9</sup>

音を出さない白い鶴(君子=鶴という暗喩)は霜で白くなる自分の髪に驚く老人に譬えられている。強いて、隠れた意味を探ろうとすると、老いの嘆きに他ならないだろう。だが、『菅家文草』の原文を読むと、本意はかなり異なることが分かる。この聯がとられた「早霜」と言う詩の結聯は次のようである。

寒心(かんしむ)せる旅客(たびびと)は樗散(ちよさん)なりとい  
へども  
後凋(こうてう)を含むこと得て貞(てい)を守(まぼ)らむことを  
欲(ほ)りす  
寒心旅客雖樗散  
含得後凋欲守貞

旅人の心を常緑樹(=後凋)に喩える喩えはおそらく藤原克己氏が「比興的寓意感託表現」<sup>10</sup>と名付けた、道真の特殊な喩え表現のカテゴリに入るだろう。また、この喩えの意味や機能は、詩末の「貞を守る」という理想または志を強調し、それを序するものになる。色あせしない常緑樹のように、詩人の心は変わらない、天皇へ永遠に忠節であると解釈できる。要するに、老いの嘆きはこの詩に見られないとは言いきれないだろうが、少なくとも詩の中心ではない。詩の本意は「貞を守る」という表現にあり、君臣唱和という理想に合致した述懐である。『菅家文草』のパラテキスト *paratexte* (つまり、テキストに追加されているテキスト、例えば自注、詩題など)から分かるように、その時道真は45歳で、国守としてまだ讃岐に滞在しており、京に戻れるかどうか不安な状況の中で生きていた。おそらく道真が危惧していたのは、老いのことより、宇多天皇に認められずにずっと讃岐

<sup>9</sup> 『和漢朗詠集』と『菅家文草・菅家後集』の引用は『日本古典文学大系』(73、72)による。以下、『和漢朗詠集』はWRS、『菅家文草・菅家後集』はKBKKと示す。WRS 370、KBKK 304。

<sup>10</sup> 藤原克己『菅原道真と平安朝漢文学』(東京大学出版会、2001)288頁。

に見捨てられてしまうことであっただろう。つまり、『和漢朗詠集』は霜に譬えられる老人の髪と鶴という比喻でイポテキストの題「早霜」を重視するが、同じイポテキストの中心たる意味かつ内容を無視していると言えよう。

続けて、『和漢朗詠集』の「雁」という部には、次の道真の聯が採られている。

碧玉（へきぎよく）の装（よそほ）へる箏（しやうのこと）は斜（ななめ）に立（た）てたる柱（ことぢ）、  
 青苔（せいたい）の色（いろ）の紙（かみ）には数行（すうかう）の書（しよ）  
 碧玉装箏斜立柱  
 青苔色紙数行書<sup>11</sup>

これだけ見れば、美しい表現の連続を通じ、空を渡る雁の描写を譬喩で美化しているにほかならない。さて、この聯のイポテキストとなる「重陽節侍宴、同賦天淨識賓鴻、應製」という詩の尾聯を見よう。

賓雁（ひんがん）人（ひと）の意（こころ）を動（うご）かしむること莫（な）く  
 向前（さきより）の旅（たび）の思（おも）ひ何如（いかん）せむことをか欲（ほ）りする  
 賓雁莫教人意動  
 向前旅思欲何如

まず、指摘すべきなのは、先ほどの「早霜」と異なり、雁が題だけではなく、テキストにもはっきり現れている点である。雁や帰雁という表現は日本へ渡った中国の詩の中にもすでに見られるもので、旅の寂しさや郷里への思いを表す典型的な表現である。重陽節の時に宮廷の詩宴でこの表現を用いた道真は中国の文学伝統に繋げようとしたと考えてもよからうが、詩の本意はスコーラシップの実演に留まるわけではない。この詩宴が行われた寛平六年は、道真がすでに遣唐大使に任ぜられた年でもあり、中国へ旅立つという可能性が具体化した時でもあった。現に、この詩が作られてからわずか六日後、道真は日本史上でも画期的な史実となった遣唐使派遣中止を進言している。このようなパラテキストが語る情報を把握すると、道真詩の「向前旅思」（これからの旅への思い、心配）という表現は単なる雁に関わる修辭表現ではなく、道真自身のリアルな考えを見いださせる要素であり、詩の理解へのカギとなる。いうまでもなく、『和漢朗詠集』で行

<sup>11</sup> WRS 322、KBKK 379。

われた切除のために、このような内容があったとは、想像もつくまい。

もう一つの例を「管弦付舞妓」という部から挙げたい。

落梅（らくばい）曲（きよく）旧（ふ）りて唇（くちびる）雪を吹き、  
折柳（せつりう）声（こゑ）新（あら）たにして手に煙（けむり）  
を掬（にぎ）る、  
落梅曲旧唇吹雪  
折柳声新手掬煙<sup>12</sup>

宇多天皇が開催した管弦の宴がきっかけで作られた詩から、藤原公任は上記の比喻表現を取りあげ、道真のイボテクストを省略した。もとの詩の尾聯は

君王（くんわう）風（ふう）を移す術（じゅつ）を得（え）むことを欲（ほ）せば  
敢（あ）へて慇懃（ねむごろ）に管絃（くわんぐゑん）を喚（よ）ぶことあらざらまし  
君王欲得移風術  
非敢慇懃喚管絃

となり、演奏から受けた感動が天皇の徳に関係づけられている。つまり、詩の本意は、演奏の素晴らしさではなく、天皇の讚美にあると言えよう。要するにこの場合も『和漢朗詠集』では本来の詩の内容が失われていると確認できる。

『和漢朗詠集』のなかの「道真」と『菅家文草』のなかの「道真」が異なることを最もはっきりと分らせる例は、讚岐時代と流謫時代の詩である。周知のよう、讚岐守に任ぜられている間の道真の詩には、二つの特徴がある。一つは讚岐の穏やかな自然を描写し、それまでの典型であった伝統的な詩とは異なる叙景詩を書いていることである。もう一つは平安文学史上に例外だとされている諷諭詩である。後者に集中しよう。白居易の諷諭詩を模範にした道真の諷諭詩は、貧しい人々のアレゴリーを通して当時の社会と律令制度の矛盾を指摘し、権力者の退廃を訴え出る、非常にオリジナルな作品である。当然のことながら、このような詩は現代の読者の興味を引くだろうが、当時の人たちにとっても興味深いと思われたのか。道真の多才を表すこの諷

<sup>12</sup> WRS 467、KBKK 434。

論詩は少なくともあらゆるアンソロジーにも含めなければならないものだろうと、私は思うが、藤原公任が選んだ讃岐時代の詩句は諷諭詩ではなく、次のような無害な作品である。

生衣（すずしのかきぬ）は家人（かじん）を待（ま）ちて著（き）むと  
 欲（ほつ）す  
 宿釀（しゆくちやう）はまさに邑老（いふう）を招（まね）いて  
 酣（たけなは）なるべし  
 生衣欲待家人着  
 宿釀当招邑老酣<sup>13</sup>

今年は例（つね）よりも異（こと）にして腸先（はらわたま）づ断  
 （た）ゆ  
 これ蟬（せみ）の悲（かな）しづのみにあらず客（かく）の意（こころ）も悲しぶなり<sup>14</sup>  
 今年異例腸先断  
 不是蟬悲客意悲

前者は「夏衣」、後者は「蟬」といった部にあり、どちらかというところノスタルジアというテーマに所属し、諷諭詩のような社会や政治に対する批判といった性格は持たない。現代でもっとも評価されている讃岐時代の道真の詩の中の「早寒十首」などは、公任に無視されると言える。ここで私は、現代読者と公任の好みの相違点について論じるつもりはない。ただ、公任が、讃岐時代の特徴的な詩ではなく、オリジナル性の低い詩をわざわざ選んでいるというところを強調したい。

藤原公任が『和漢朗詠集』の編集に含めた志または動機は、流謫中の道真によって作られた『菅家後集』の作品からどの詩句が採られているかを見れば明確である。周知のように、大宰府での道真の詩は身の潔白を訴えたり、帰郷への願望を唱えたり、友人や家人への思いに浸透されている。『菅家後集』の巻頭詩「自詠」で「家から離れたのは三、四ヶ月。涙は百、千粒も落ちて行く」と嘆くように、イポテクストで展示される道真の流謫生活は労苦と絶望ばかりだったと考えられる。

『和漢朗詠集』に見られる『菅家後集』の聯は実はわずか三つであり、どれも詩集の主題である「左遷」や「流謫」からかけ離れた内容のものである。例えば「閑居」という部には次の道真の聯がある。

<sup>13</sup> WRS 195、KBKK 251。

<sup>14</sup> WRS 195、KBKK 251。

都府楼（とふろう）は纒（わづ）かに瓦（かはら）の色（いろ）  
 を看（み）る、  
 観音寺（くわんおんじ）は只（ただ）鐘（かね）の声（こゑ）を  
 聴（き）く、  
 都府楼纒看瓦色  
 観音寺只聴鐘声<sup>15</sup>

確かに、閑居、つまり閑静な住居、または世事を離れてのんびりと暮らすというテーマには適切だろうが、イポテクストから浮上する道真の気持ちは、平穏や閑雅どころではないと思われる。

此（こ）の地（ところ）は身（み）に檢繫（けんけい）無しと雖も  
 何（なに）為（す）れぞ 寸歩（すんぽ）も門（かど）出（い）でて  
 行（ゆ）かむ  
 此地雖身無檢繫  
 何為寸歩出門行

有名な「不出門」であり、この詩が「閑居」の部に摘句されるのは驚くところであろう。ここでも、イポテクストの内容ではなく、その詩の外見だけを重視する『和漢朗詠集』の特殊性が分かる。『菅家文草』と『菅家後集』の背景にある道真のストーリーは重要視されず、異なる目的のために外見のみが擬製され、異なる作品に変えられたと言っても大げさではあるまい。

もちろん、漢文の天才として尊敬された藤原公任は道真の詩集だけではなく、菅原道真という詩人かつ歴史上の人物をよく知っていただろう。だが、間違いなく『和漢朗詠集』は道真の詩集のダイジェストまたは要約として編纂された作品ではない。そして、公任が道真のイポテクストにした切除は偶然な省略ではない。部立てという原理—ジュネットの用語ではアルシテクスト *architexte*<sup>16</sup> と言えるか—に従いながら、詩歌集の本質にもっとも適切な詩句だけを選び、『和漢朗詠集』という新しい作品を編集、いや、創作するのである。『古今和歌集』の部立ても思い出させる『和漢朗詠集』の花鳥風月や四季の配列には、やはり流謫や社会非難というテーマは不適切であると判断されただろう。ただし、本論では藤原公任がなぜこのような部立てにしたかという問題については論じない。

さて、これまでの例で分析した切除という変形はジュネットの縮小 *réduction*<sup>17</sup> という変形のグループの一環に分類され、形式的な段

<sup>15</sup> WRS 620、KBKK 478。

<sup>16</sup> 注1 前掲書、15頁。

<sup>17</sup> 注1 前掲書、387頁。

階で起こるものである。つまり切除は、原文イポテクストを直接切り裂き、新しい仕組みのイペルテクストに差し挟むことであり、理論的に新しい意味を追加するものではない。しかし、切除のような「形式的変形」であっても、意味的な変更も引き起こされることがある。例えば、先ほど挙げた「早霜」の本意は尾聯の「貞を守る」という表現に表れているわけだが、頸聯だけを挙げる『和漢朗詠集』を読むだけでは、作品の真意を読み取ることはできない。のみならず、「雁」の部に採られた詩句の場合は、自然描写より深い意味を強いて見いだそうとすると、誤った解釈に至りうるおそれがある。『和漢朗詠集』は自然や景物の叙景に集中し、道真の詩に認められるテーマ社会非難、君臣関係の讚美などが見いだせなく、結果的に消されたと言える。つまり、イペルテクストはイポテクストの目的、志、モチベーションを無くしたのである。私にはこのような内容の変更は、ジュネットが示す脱動機化 *démotivation*<sup>18</sup> に非常に近いものに見える。氏によると、脱動機化という意味論的変形は「単純に否定的なもので、これは、もともとの動機を削除ないし省略することにある」<sup>19</sup>。「早霜」の例に適用すると、貞節という裏の意味を削除することに当たるだろう。更にジュネットが「そのうえ、周囲の意味的圧力はそのままなのだから、動機のない行動はない、しかもその動機を明示する必要はないという怖るべき原理により、ある動機を削除するだけで別の動機が不可避免的に暗示されうるのだ。こうなると、脱動機化は動機変換 *transmotivation* の価値をもつことになる」<sup>20</sup> と強調する通り、もとの動機を削除または切除するだけで、読者の目には別の動機と志が浮かび上がることにもなる。『和漢朗詠集』を例にすると、例えば流謫の不如意をテーマの中心とする「不出門」は、頸聯の二句に縮められた結果、閑居の意味で作られた詩句だと見えてしまう。これこそ氏が言う動機変換であろうと私は言いたい。

要するに、『和漢朗詠集』は、『菅家後集』のイペルテクストとして読まれた場合、詩人道真の志または記憶を「裏切る」と言っても過言ではない。だが、このような読み方はイポテクストを知っている読者にしかできない。今私は『和漢朗詠集』が『菅家文草』より単純な作品であると言おうとしているように見えるかもしれない。しかし、そうではなく、逆に『菅家文草』『菅家後集』『白氏文集』などの様々なイポテクストをコラージュした『和漢朗詠集』という新しい作品の特性と価値を認めるのである。ジュネットの理論を引用すると、

<sup>18</sup> 注1 前掲書、550頁。ジュネットは詩より、小説や演劇に集中するが、本論ではその理論は詩集にも適用できると述べたい。

<sup>19</sup> 注1 前掲書、546頁。

<sup>20</sup> 注1 前掲書、550頁。



「イペルテキスト性は、ある意味で、器用仕事 *bricolage* に属している。[...]「古いものから新しいものをつくる」技術は、「その目的で作られた」生産物よりも複雑で味わい豊かなものを生産する利点がある、ということだ。つまり新しい機能が古い構造と重なり合い、錯綜し、それら二つの共存する要素同士の不協和音が、全体にその味わいを添えるのである」<sup>21</sup>。『和漢朗詠集』にはここまでの定義が適用できるかどうかという点について、まだ議論の余地があろうが、少なくともこれまで記述した形式的変形と意味論的変形がジュネットの用語で分析できることを確認しておきたい。

### 3. 『源氏物語』 の場合

前節のジュネットの理論を『源氏物語』に適用したらどうなるだろうか。周知のよう、『源氏物語』の「須磨」の巻は、『菅家後集』から二箇所を引用する。

その夜、上のいとなつかしう昔物語などしたまひし御さまの、院に似たてまつりたまへりしも、恋しく思ひ出できこえたまひて、「恩賜の御衣は今此に在り」と誦じつつ入りたまひぬ。御衣はまことに身はなはず、かたはらに置きたまへり<sup>22</sup>

入り方の月影すごく見ゆるに、（光源氏は）「ただこれ西に行くなり」とひとりごちたまひて

いづかたの雲路にわれもまよひなむ月の見るらむこともはづかし<sup>23</sup>

『菅家後集』の原文は次のようである。

恩賜（おんし）の御衣（ぎょい）は今ここに在り  
恩賜御衣今在此<sup>24</sup>

ただこれ西に行く 左遷ならじ  
唯是西行不左遷<sup>25</sup>

後者は道真と月の空想的な対話を詠んだ詩からの一句である。道真も月も西へ流れるが、道真と違って月の移動は左遷によるものではな

<sup>21</sup> 注1 前掲書、655頁。

<sup>22</sup> 『源氏物語』「須磨」203頁（『新編日本古典文学全集21』）。

<sup>23</sup> 注23前掲書、208-209頁。

<sup>24</sup> KBKK 482。

<sup>25</sup> KBKK 511。

く、世界のルールに従う移動だ、という形で道真の無実の訴えを現す詩だと言えよう。前者は、「九月十日」という題の詩からの一句であり、わずか一年前に醍醐天皇と直接に詩の唱和ができていたのに、今は流謫の身に陥ってしまったという道真の嘆きを表している。どちらもはっきりと流罪のテーマを強調するイポテキストである。したがって、流罪のテーマを省く『和漢朗詠集』に対して、『源氏物語』はそのテーマを中心とする詩句を引用している。

だが、『源氏物語』における道真の暗示は、詩句の引用に限らない。同じ「須磨の巻」には次の箇所もある。

海人ども漁りして、貝つ物持て参れるを、召し出でて御覧ず。浦に年  
 経るさまなど問はせたまふに、さまざま安げなき身の愁へを申す。そ  
 こはかたなくさへづるも、「心の行方は同じこと。何か異なる」と、  
 あはれに見たまふ。

貧しい人たちへの同情は非の打ち所のない人物である光源氏の特徴であろうが、特にこの須磨の巻では特別な意味がある。先行研究に指摘された通り、源氏が現す下層民への同情は、讃岐の下層民の苦勞を描く諷諭詩における詩人道真の姿にもすでにあつた。藤原克己氏が指摘したように<sup>26</sup>、菅原道真と光源氏は交道難を通り、流罪に遭い、共通の才能や思考をもつことを認めることができる。間違いなく、『菅家文草』『菅家後集』と『源氏物語』の関係は、超テキスト性であり、『源氏物語』は道真の詩集のイペルテキストとして分析できると考えられる。結論を先取りすると、『源氏物語』は『和漢朗詠集』より深いイペルテキスト性を現す。つまり、ジュネットの理論から見ると、紫式部が果たしたテキストの変形は藤原公任の編集実践より多面的でイペルテキスト的である。

形式的な変形から始めると、まず、韻文で語られた道真の流罪が、散文である物語の源氏の流罪のエピソードに転移されていることは自明である。それはジュネットの用語で表すなら、おそらく物語化 *narrativisation*<sup>27</sup> という様式変換 *transmodalisation* になるだろう<sup>28</sup>。周知のように、『源氏物語』の中にも頻繁に韻文が現れるので、完全なる散文作品だとは言いきれないかもしれないが、本論では散文として扱う。一方、道真の詩集は—そしてここは、『菅家文草』の散文篇を

<sup>26</sup> 藤原克己『菅原道真 詩人の運命』（ウェッジ、2002）180-185頁。注11前掲書、IV-5「日本文学史における『白氏文集』と『源氏物語』」。

<sup>27</sup> 注1前掲書、477頁。

<sup>28</sup> 注1前掲書、477、484頁。

対象外にする一、韻文でありながら、物語的な性格を現すと考えられる。つまり、再現様式の段階で異なっても、すでにイポテクストの『菅家文草』『菅家後集』にも叙事的な性格を見いだすことができる。

さて、上記の物語化という様式変換は、ジュネットが定義する相互様式的変形 *transformation intermodale*、つまり「ある様式から別の様式への移行」という変形の種類に属するものである。これは、様式内変形 *transformation intramodale*、つまり「その様式の内的機能に影響する変化」<sup>29</sup>とは異なるものとして氏に識別されている。物語化が相互様式的変形の一類であるならば、無声化 *devocalisation*<sup>30</sup>、つまり一人称から三人称への移行は、様式内変形の一例と考えられる。私はこの変形も『源氏物語』の中に見いだすことができると思う。原則として一人称として詩またはその詩の背景となるストーリーを語る詩人道真は、『源氏物語』においては三人称の語り手になるのである。ストーリーの焦点<sup>31</sup>はその詩を詠む・吟詠する主人公（道真・光源氏）から離れないが、『菅家後集』の場合は道真が主人公かつ語り手だと言えるのに対して、『源氏物語』の語り手は源氏ではなく、外から源氏を「見る」語り手である。

今私は、主人公という単語を使うことには少なくともためらいがあった。源氏の場合は、物語のメイン・キャラクターであることに異議がないだろうが、『菅家後集』の作者・撰者である道真は同作のキャラクター・登場人物だと言えるのだろうか。しかし、本論の目的はテクストのなかに現れる人物から作者を見いだすことではなく、両テクストの相互関係を分析することである。この大前提で、テクスト内の道真をイポテクストの登場人物として見てもらいたい<sup>32</sup>。

登場人物としての道真は、物語化や無声化などの形式的変形のみならず、意味的、単純に言う内容の段階における変形も受ける。このような意味的変形は「イポテクストの意味そのものを修正するテーマ的転移である」とジュネットによって説明される。更に、氏は意味的変形を二種類の変形的実践に区別する。その一つは物語世界的転移 *transposition diégétique* すなわち物語世界の変化であり、もう一つは語用論的 *pragmatique*、すなわち筋 *action* を構成する出来事と行為の修正である<sup>33</sup>。ジュネットが挙げる物語世界的転移の例はジェイムズ・

<sup>29</sup> 注1 前掲書、477頁。

<sup>30</sup> 注1 前掲書、495頁。

<sup>31</sup> 焦点変換と有声化の違いについて、注1 前掲書、494頁を参照。

<sup>32</sup> この点についてジュネットは、イポテクストとパラテクスト（例えば作者についての情報）の境をあまりはっきり限定せず、全てはイペルテクストに対して「第二元」のテクストとして扱うようである。

<sup>33</sup> 注1 前掲書、503-504頁。

ジョイスの『ユリシーズ』である。ジョイスの小説は、古代地中海に設定されたホメロスの『オデュッセイア』のテーマ（主人公のさ迷い）、またはストーリーの出来事を取り出し、二十世紀初頭のダブリンの世界に設定を修正するものである。無論、このような顕著な設定変更はストーリーの変更も引き起こすと、氏は加える。例えば、ダブリンをさ迷う『ユリシーズ』の主人公は、ギリシャ風の帆船でその旅ができるわけがない。要するに、このような転移の実践は「まさに、たとえば同じ筋を（あるいはほとんど同じ筋を）別の世界に転移させることによって（とりわけ）両者を分離することにあるのだ」<sup>34</sup>。また、このような物語世界変換 *transdiégétisation* は、二つの変形に区別するべきだと、氏は述べている。一つは等質物語世界的変形 *homodiégétique* であり、「ある神話的ないし歴史的主題を反復するすべての古典悲劇」はその一例であるとしている。もう一つは異質物語世界的変形 *hétérodiégétique* と言い、「筋はその枠組を変えており、その筋を支える登場人物たちももはや同一ではない」<sup>35</sup>としている。その例としては『ユリシーズ』の主人公がオデュッセウスではなく、レオポルド・ブルームという新しい人物であることを挙げている。

さて、『源氏物語』に戻ると、前節にあげた転移の実践は、紫式部にも見いだされると考えられる。ある程度、道真をモデルに、光源氏のキャラクターを創造した紫式部は両人物が共有する筋（つまり、流謫されること）を再利用するだけでなく、その筋を空想の世界（物語の中の平安京）に転移する。紫式部が作った物語の中の世界は、現実の世界を忠実にコピーしたものでありながら、歴史的世界とあくまで同じものだとは言えない。つまり、光源氏が行動する世界は、菅原道真が生きていた世界ではない。

だが、ジュネットの先ほどの用語で『源氏物語』のケースを分析しようとする、イポテクストからイペルテクストへの転移は等質物語世界的変形とも言い切れず、『ユリシーズ』のような異質物語世界的変形（つまり、一つの世界から別世界へ）とも言えない。実際、須磨で光源氏が吟詠する『菅家後集』の詩句は、九世紀末の日本に生きていた詩人の作品か、物語の中の空想の世界に生きていた詩人の作品か、どちらとも言えない。いや、このような質問に答える意味すらなくなる。なぜなら、紫式部は意志的に現実世界と想像世界を融合し意図的に読者と戯れているようだからである。

以上、須磨の巻などに浮かび上がる道真と源氏の二重性を確認し、道真の詩集から再現できる左遷の筋が物語世界的転移を通して『源氏物語』の世界に転移されたことを検証した。

<sup>34</sup> 注1 前掲書、504頁。

<sup>35</sup> 注1 前掲書、507頁。

最後に、もう一つジュネットに定義されたイペルテキストの変形を挙げ、イポテキストとしての『菅家文草』『菅家後集』について考察したい。この変形は価値変換 *transvalorisation* と言い、ジュネットによると「価値論的次元に属する操作の全体というふうに、つまり、ある行為もしくは種々の行為の全体——たとえばある「登場人物」を特徴づける一連の行為、態度、そして感情——に明示的または暗示的に帰せられた価値を対象とする操作の全体」<sup>36</sup> という意味がある。

イポテキストとイペルテキストの主な共通点となる流謫のエピソードを丁寧に分析しよう。まず、共通の筋といっても、いくつかの相違点も明らかにある。たとえば、菅原道真は醍醐天皇の宣命で大宰権帥に左遷され、厳しい生活の状況に陥り、わずか二年間で没するのに対して、光源氏はそのような危険を避けるために自発的に流離し、後に京に戻り、最高の榮譽を受ける。前述した紫式部と読者の戯れはここにおいてあると考えられる。

世の中、いとわづらはしく、はしたなきことのみまされば、「せめて知らず顔にあり経ても、これよりまさることもや」と思しなりぬ<sup>37</sup>

と始まる「須磨」の巻の巻頭から「これよりひどい目に遭う」恐れが暗示される。それはもちろん、弘徽殿女御を中心する源氏の政敵が企てる陰謀であろう。紫式部と読者の戯れは始まった。つまり、『菅家後集』の明示的な引用で源氏と道真の同一化を認めざるを得ない読者は、「光源氏も、道真朝臣のごとく客死してしまうのか」という不安に駆られ、物語の筋に一層夢中になっただろうと、私は想像する。つまり、紫式部はイポテキスト『菅家後集』を利用し、イペルテキスト『源氏物語』のサスペンスを仕上げようとしたのではないかと解釈したい。もちろん、この解釈は道真の詩と彼のストーリーを知る読者のみにできることである。ところで、サスペンスに関しては、昔の物語を再び語り直すことの面白さはそこにあると、ジュネットが述べる。彼はギリシャ神話の演劇化や修正について、「われわれは過去の物語の結末をあらかじめ知っているのである。われわれの「文化」は、今日周知の事実とならざるをえぬよう過去において定められたことを後になってから規定するのであり、それはもっぱら出来事の無力、つまりその出来事についてすでに語られそして聞かれたことは回避できないという運命を耐え忍んでいるのだ」<sup>38</sup> と述べる。ジュネットが指摘する過程は、聴衆がすでに知っている登場人物のストーリーを再び語

<sup>36</sup> 注1 前掲書、573頁。

<sup>37</sup> 注23前掲書、161頁。

<sup>38</sup> 注1 前掲書、576頁。

ると、だれでも知っているエンディングへの期待を強める結果となることであろう。

しかし、源氏のケースはそれとはわずかに異なる。『源氏物語』は菅原道真の「物語」の単純なリメイクではなく、登場人物も、筋も、物語世界も異なり、菅原道真という人物と共通点を持つ光源氏という新たな登場人物の新たなストーリーである。といっても、主人公の同一化または二重性は確かであり、このような筋の変更を通じて紫式部は主人公の価値化という変形を実践しようとしたと言えよう。ジュネットが定義する価値化 *valorisation* とは、「語用論的または心理的な変形的手段によってその人物に、イポテクストで与えられていた役割よりもさらに重要な、かつ／またはさらに「共感的な」役割を、イペルテクストの価値体系において賦与することにある」<sup>39</sup>。先ほど指摘した筋の転換は、客死する主人公がそうしない主人公に変わること、つまり、語用論的な変形であり、そしてそれに従って、「価値」の変形が引き起こされる。ネガティブな結末に至り、悲劇的人物だと言える道真に対して、源氏は成功した登場人物であり、ポジティブな結末—少なくとも、物語の途中まで—に至る。このような「価値」の差がこの二つの作品にはあると考えられる。

もちろん、イポテクスト『菅家後集』の中の道真には、ネガティブな価値が付いているわけではない。それどころか、君主に忠実で、不公平な社会の矛盾を訴える官人詩人という非常にポジティブなキャラクターとして現れる。しかし、後世の人々にとって、『菅家文草』と『菅家後集』で語られた菅原道真の「物語」は、彼の死去で—つまり、道真の詩文では語られるわけがない筋で—終わると思われたのではないか。そのような悲劇的な結末は、彼の全ての作品に不幸の光を当てる結果となったと考えられる。このように考えれば、同じような悲劇的な結末から逃れる光源氏には価値化を見出せるのである。

作者紫式部の意図は我々には推測できまいという意見もあろうが、平安人における菅原道真の評価とイメージはその死後、非常に変わってきたことも否定できない。周知のように、後世の人々は道真のストーリーを天神信仰の発達と結び付けたのである。『源氏物語』が書かれたのは、道真の死去からほぼ百年後であり、北野天満宮の建立から約半世紀後の、天神信仰が形成された時期だとされている<sup>40</sup>。左遷され、大宰府で犯罪者の身分で没した道真は、伝説によって崇り神として恐れられていたが、後に天満天神として崇拝されるようになり、最終的には学問の神、また藤原家の守り神にもなった。これまで述べて

<sup>39</sup> 注1 前掲書、574頁。

<sup>40</sup> 竹居明男編著『天神信仰編年史料集成 平安時代・鎌倉時代前期篇』（国書刊行会、2003）。

きたジュネットの用語と理論は別にして、歴史的な視点からも、民及び貴族の社会における道真のイメージは天神信仰を通じて価値化のプロセスを果たしたと、すでに明らかにされている<sup>41</sup>。ある意味で紫式部はこのような歴史上の過程に文学的体形を与えたという解釈も可能である。

価値化という変形だけではなく、紫式部は本当にこのような複雑な文章構成を意図的に考えたのか、ということについても考えてみたい。そのためには、まずジュネットも強調した次の大前提を挙げなければならない。その内容は、イポテキストはイペルテキストの単純な理解に不可欠なものではない。イペルテキストそのものを読み、理解するだけでも、ストーリーを楽しめることがともかく可能である。ただ、このような「浅い読み」では、上述した超テキスト性のいくつもの実践を理解できないであろう、ということである。紫式部が菅原道真の詩を引用したのは、道真と源氏の二重性を意図的に読者に明示しなかったからだと考えられる。少なくとも、偶然な引用とは考えられない。

#### 4. 終わりに

以上、イペルテキスト変形を分析した結果、藤原公任と紫式部は『菅家文草』と『菅家後集』といった共通の作品から詩句を引用しているにも関わらず、それぞれが異なるイペルテキストの変容を果たしていることがわかった。

その変形はジュネットの用語であらためてまとめると、『和漢朗詠集』の場合は切除 *excision*、つまりテキストの縮小 *réduction* が行われ、イペルテキストの意味をもたらす部分も切り除かれてしまい、脱動機化 *démotivation* のような動機変換 *transmotivation* が引き起こされたことになる。

一方、『源氏物語』の場合は、物語化 *narrativisation* と無声化 *devoicalisation* といった様式変換 *transmodalisation* のほかに、物語世界変換 *transdiégétisation* も認められる。この変換に関して、ジュネットは等質物語世界と異質物語世界の二種類の物語世界変換を定義しており、『源氏物語』では両者の融合が確認できる。更に、価値変換 *transvalorisation* を通じ、登場人物の「価値」が修正され、価値化 *valorisation* が行われている。

紫式部が、イポテキストから把握できる道真の姿をより忠実に描いているのに対して、藤原公任は動機化という変形で、イポテキストと

<sup>41</sup> 林屋辰三郎「天神信仰の遍歴」『天神信仰』民衆宗教史叢書4（雄山閣、1983）。

全く異なる動機をもたらすイペルテクストを作っている。編纂に当たったの公任の目的は菅原道真のストーリーを語るのではなく、道真の詩句を利用し、他の詩歌とともに調和した作品を作り出すことであったと考えられる。従って、詩人道真の性格が最も良く表れる諷諭詩のような詩は『和漢朗詠集』の美学に合わないものだと判断されたため、排除されたのではなかろうか。テキストの分析から判断すると、紫式部における道真詩の引用はより正確に菅原道真の姿を思い浮かべせると言える。

また、ジュネットの言葉で『和漢朗詠集』と『源氏物語』を比較すると、前者は「社会=文化的な次元に属する機能」があり、後者は「もっと高貴にして美的な機能である。それは真面目な体制の厳密に創造的な機能」<sup>42</sup>を持つ。つまり、『和漢朗詠集』は佳句と名歌をテーマ別に配列することによって、すらすらと次々に読みたいという読者の要求—ジュネットが言う「社会的要請」—に応えるのである。そして、テキスト面では新しい文章を創造したり、追加したりすることもしない。部立てというテキストの骨組みに、各イポテクストを組み込むだけである。一方、紫式部は印象を受けた作品から、テキストの一部を引用し、個人的かつ独特な想像や感性と混ぜ込んで、完全に新しい作品を創造しているのである。藤原公任の作品には美学的または想像的な働きがないとは言わないが、あくまで公任は編集、紫式部は創造、といった根本的に異なる創作過程をたどっていると認めざるを得ない。

以上、西洋文学を中心としたジュネットの超テクスト性の理論が日本文学にも適用できることを論証した。『源氏物語』と『和漢朗詠集』におけるイペルテクスト変形が、ジュネットの用語を用いて分析できるのである。そして、この分析方法により、作品と作者の価値をあらためて認めることも可能である。

当然のことながら、本論で指摘したイペルテクスト変形を見いだすためには、イポテクストの現存が不可欠である。ロバート・ボーゲン (Robert Borgen) は道真について「彼は神として奉られるようにならなくても、忘れられはしなかったろう」<sup>43</sup>と述べているが、私はおそらく天神信仰がなかったのであれば、道真の詩集は後世まで読

<sup>42</sup> 注1 前掲書、650-651頁。

<sup>43</sup> 筆者訳。「He was, however, indeed a remarkable figure deserving the highest respect for his real achievements as a poet, scholar, educator, diplomat, and official. He did not need to be deified to be remembered」Robert Borgen, *Sugawara no Michizane and the Early Heian Court* (Harvard University Press, 1986) 336頁から。



み伝えられなかったのではないかと思う<sup>44</sup>。もし、『菅家文草』と『菅家後集』が現存しなかったとにしたら、紫式部が果たした超テキスト性変形の十分な論証もできず、『源氏物語』の豊かさと作者の才能は少なくともわれわれには分からなくなっていたはずである。

<sup>44</sup> 道真の詩集の伝来については、ボーゲン、注44前掲書、223頁、または川口久雄『菅家文草・菅家後集』（岩波書店、1966）45頁を参照。

**Perspectives on East Asia.** This volume is a collection of eight articles by different scholars from Japan, China, and Italy. Although the topics covered belong to different fields, such as literature, history, linguistics and sociology, all of the included works are geographically focused on cultural aspects of East Asia. The interdisciplinary character of the collection is meant to provide a broader perspective on the cultures and societies of the Far East, nonetheless the individual articles are each based on specific and focused research. The authors featured in the volume are Eduardo Barberis, Edoardo Gerlini, Tiziana Lioi, Massimiliano Tomasi, Pierantonio Zanotti, Tanina Zappone and Zhou Yuhui. The volume is also proud to include a short piece by professor Takei Kyōzō on Omowaku utaawase.

**Ikuko Sagiya** is a professor of Japanese Language and Literature at the University of Florence. Her major field of research is Japanese Classical Literature, especially Heian poetry and fiction.

**Valentina Pedone** is a researcher of Chinese Language and Literature at the University of Florence. She has published articles in China and Europe and lectures on many aspects of Chinese migration.

**Table of contents:** Japanese studies – 役者評判記と遊女評判記の交流 – 『おもはく哥合』について – /Exchanges and relationships between the critique about actors and the critique about prostitutes: *Omowaku utaawase* (Takei Kyōzō) – イボテクストとしての菅原道真の詩『和漢朗詠集』と『源氏物語』の場合/Sugawara no Michizane's poems as hypotext: the case of *Wakanrōeishū* and *Genji Monogatari* (Edoardo Gerlini) – Spirit, Body, and the Construction of the Self: Some Preliminary Considerations on the Question of Christianity in Modern Japanese Literature (Massimiliano Tomasi) – The Incorporation of Scientific Discourse in Yamamura Bochō's 'Prismist' Poetry (1914-1916) (Pierantonio Zanotti) – Chinese studies – Chinese entrepreneurs in Italy. An asymmetric socio-economic embeddedness (Eduardo Barberis) – 100 years of Qian Zhongshu and Yang Jiang: A Centennial Perspective (Tiziana Lioi) – China's Public Diplomacy: between old propaganda and civil participation (Tanina Zappone) – The Border and the Hinterland: Two Different Pictures of Commerce Development in the Northern Shaanxi Province since the 15<sup>th</sup> Century (Zhao Yuhui).

